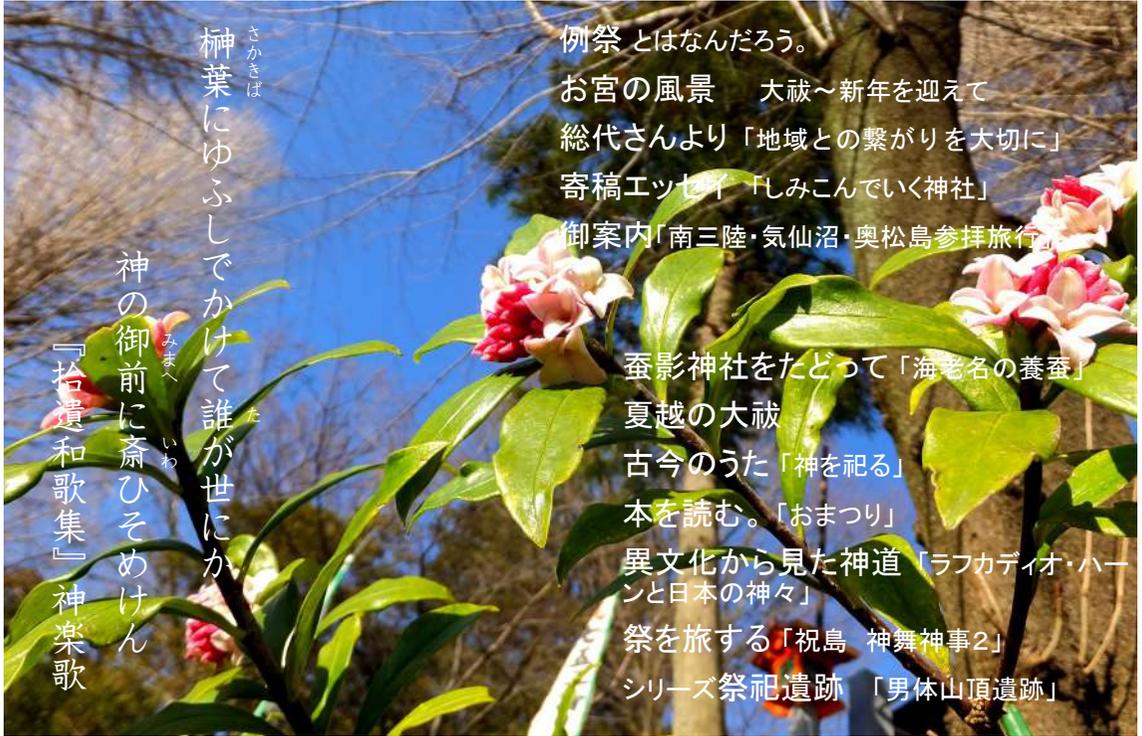


弥生

vol. 2



例祭 とはなんだろう。

お宮の風景 大祓～新年を迎えて
総代さんより「地域との繋がりを大切に」
寄稿エッセイ「しみこんでいく神社」
御案内「南三陸・気仙沼・奥松島参拝旅行」

蚕影神社をたどって「海老名の養蚕」

夏越の大祓

古今のうた「神を祀る」

本を読む。「おまつり」

異文化から見た神道「ラフカディオ・ハーンと日本の神々」

祭を旅する「祝島 神舞神事2」

シリーズ祭祀遺跡 「男体山頂遺跡」

さかきば
神葉にゆふしでかけて誰が世にか

みまへ
神の御前に齋ひそめけん

『拾遺和歌集』神楽歌

ひとときわ厳しかつた寒さも遠のき、弥生神社のお祭りの季節になりました。

皆さまは、お祭りと言えば出店や演芸大会を思い浮かべられるかと思えます。しかし、それらは神賑（しんしん）行事とか付け祭りと言ってお祭りを盛り上げるためのものです。お祭りとは、神様に真の心をもつて安らかな日々生活とさまさまな収穫に感謝し、人々の幸せを願う行事です。そしてこの儀式にあたり、古来よりいろいろな厳しい定めがあります。その中に齋戒（さいかい）潔斎（けっさい）祓（はら）えがあり、神事を執り行う者は清浄でなければなりません。

今年三月下旬、天皇皇后両陛下におかれましては、伊勢の神宮に御滞在され、遷宮後初めて外宮、内宮に御参拝になられました。五日間にわたる長い御滞在でしたが、その間、両陛下も御神域にある齋館に入られ神職らと共にお籠（こも）りをされたのです。日常生活の中で、知らず知らず犯したであろう罪穢れを祓い清め、清らかな心身をもつ神様にお仕えるため神事の前にはお籠りをします。これを参籠（さんろう）と言います。大きな神社では固く守られており、一か月間の参籠もあるようです。もちろん一般の神社でも祭儀の基本として守っております。そして、すぐの神事が終わった後に解斎（げさい）と言って日常生活に戻るためにきやかに過ごします。民間でも古くより行われており、有名な社寺の近くには必ずと言っていいほど大きな繁華街があります。

また、例祭にはもうひとつ神事があります。それは神幸祭、巡幸祭などと呼ばれている神輿に関わる行事です。最近では、神事はもとよりお祓いもせず神輿を担ぎ、例祭でも気にせず、そんな神輿に神様をお乗せすることもあるようです。神輿はもちろん、それを担ぐことも大変な重事です。基本を守り、努力することにより、人々に認められる行事となるのでしょうか。

（宮司）

例祭

とはなんだろう。

例祭は、神社にとってとくに重要な「大祭」にあたり、その神社や祭神にとつて特別に由緒のある祭典です。弥生神社の例祭は、四月十日と定められています。現在では毎年十日に近い日曜に執り行っています。（前日土曜日が前夜祭です。）

例祭の日は、出店、演舞などでにぎわいますが、神事についてはあまり知られていません。ちなみに例祭において、神霊が宿つた依り代（よりしろ）を本殿から神輿に移し、地域内へ御幸する神幸（しんこう）祭・巡行祭も大切な神事です。

本殿・拝殿において神事がどのように行われているのか、また、例祭にまつわる用語や祭儀具などを紹介します。

式次第



神様にお供え物をし、祝詞を奏上。参拝者が拝礼し、直会を行なうというのが、例祭の基本的な順序です。

一、祓所で修祓

手水の後、神職と参拝者は祓所に進み、大麻、塩湯でお祓いを受けます。弥生神社の例祭では本殿横に祓所を設置します。その後、拝殿へ参進します。

二、宮司一拝

宮司がご神前に一礼します。参列者も宮司に合わせて一礼します。

三、ご本殿の御扉を開く

ご本殿の御扉を開きます。その間、警蹕がかけられます。一同頭をたれて敬虔の意を表します。

四、神饌を供す

神前に神饌をお供えします。

五、祝詞奏上

宮司が神前で祝詞を奏上します。

六、本庁幣を献す

神前に本庁幣をお供えします。

七、献幣使祭詞奏上

献幣使が祭詞を奏上します。

八、楽を奏す

神社によって様々な雅楽や舞楽が奏されます。

九、玉串を奉りて拝礼

宮司、神職、献幣使に続いて参列者が玉串を持って拝礼（三礼二拍手一拝）を行います。

十、本庁幣を撤す

十一、神饌を徹す

神饌をおさげします。

十二、御扉を閉じる

十三、宮司一拝

*直会

会場を移して神様のお下がりをいただきます。

***大祭**：神社祭祀（さいし）の区分のひとつ。大祭には、祈年（きねん）祭、新嘗（にいなめ）祭、式年祭、鎮座（ちんざ）祭、遷座（せんざ）祭、合祀（ごうし）祭、分祀（ぶんし）祭などがある。祭祀を内容や規模により区分することは、古代律令祭祀までさかのぼり、戦後の祭祀区分は、『神社祭祀規定』に定められている。

***修祓（しゅぱつ）**：あらゆる祭典の直前に奉仕者、参列者などの罪穢（けがれ）などを祓い除く行事。起源は伊邪那岐（いざなぎ）命が黄泉国より帰り、筑紫の日向の橘の小門（おとし）阿波岐原（あわぎはら）にて、身に付けていたものを棄て海水に身を浸す禊（みそぎ）を行ったという故事による。

***警蹕（けいひつ）**：祭祀祭礼において降神、昇神、開扉、閉扉などの際、神職によつて発せられる「おー」という独特の声。神霊に対して発せられると同時に、参列者に畏（かしこ）みを促す。

***本庁幣（へい）**：神社本庁から例祭の時に各神社に奉獻される幣帛（「へい」はく）に神に奉獻するもの。律令制度において、朝廷では、祈年祭、月次（つきなみ）祭、相嘗（あいなめ）祭、新嘗祭などで神祇官が各神社の祝部（はふりべ）に幣帛を配布した。

***献幣使（けんぺいし）**：神社本庁から各神社に幣帛を奉獻するための使い。

***直会（なおらい）**：祭典終了後、神様にお供えした神饌（しんせん）をいまだく宴会であり、祭典を構成する重要な儀式。

大麻（おおぬさ）

祓の具として用いられる大麻には、神の枝に麻苧（あきお）や紙垂（しで）をつけたものと、白木の棒に紙垂をかけたものがある。また、大麻は又サ（幣麻奴佐）の美称である。神に祈るときに捧げる物や罪を祓うときに差し出されるものを又サといひ、主に木綿、麻、布帛や紙が使われた。



塩湯（えんとつ）

堅塩を湯で溶かしたもので、古くから浄めのために用いられ、平安期に執筆された『皇太神宮儀式帳』にも記載がある。祓いを行うときは、神の小枝の葉先を器の塩湯に浸し、左右左の順に祓う。



玉串（たまぐし）

神の枝に紙垂（しで）や木綿（ゆう）を付けたもので、神職や参拝者が神前に拝礼するときに捧げられる。玉串はもともと神霊の依代（よりしろ）神が降臨した時の宿り場）だったとされる。その由来は、『古事記』において天照大神が岩戸にお隠れになった際、神々が真神に玉、鏡などをつけて招いたと記されている。また語義については、中世の国学者本居宣長が、「手向串（たむけぐし）」の意とし、平田篤胤は玉などをつけたから玉串とし、六人部是香（むとべよしか）は、神霊の宿る「霊串（たまぐし）」の意としている。

神饌（しんせん）

お祭りなどで神様に献上する食事。神様に食事を差し上げて、そのお下がりを参列した人たちでいただく「神人共食」（しんじんきょうしよく）が、日本の祭りの特徴である。一般的に米、酒、餅、魚、鳥、海菜、野菜、果物、菓子、塩、水、地元の産物などが捧げられる。地域によっては特別な由来のある神饌が捧げられる。また神饌には、生のまま供えられる生饌（せいせん）と、調理したものをお供えする熟饌（じゅくせん）がある。そして神社では、定期的な祭り以外にも、お日供（にっく）として神饌を捧げる祭りが行われている。



【参考】國學院大學日本文化研究所編『神道事典』、神社本庁監修『神道のいろは』、神社本庁編『神社祭祀同行事作法解説』他

お宮の風景

おおはらへ

大祓、新年を迎えて



平成25年 大晦日 大祓



平成26年 1月



平成26年 元旦



平成26年 元旦



平成26年 1月

「弥生神社へ初詣」

新しい年が明け、今年のご縁あって弥生神社へお参りすることになりました。小学生と幼稚園児の息子二人に地図を持たせ、「ゴールは弥生神社」のやさやかな探検です。日々、雑多な用事に追われている私にとって、時間を気にすることなく散策を楽しみ、神社へ初詣に行くということは、この上なく贅沢なひと時となりました。

息子達の道案内で無事到着。参道の桜は寒そうでしたが、春の景色を想像しながら鳥居の下まで来ると、境内はお正月らしく凛とした空気に包まれました。石段を上がってまず目に入ってきたのは茅の輪です。初めて見るので息子達は驚いていました。私も実物を見るのもくぐるのも初めてでした。権禰宜さんから茅の輪は氏子総代の皆様の手によるものであることや、くぐり方などを教えていただきました。

いよいよ社殿の前まで来ると背筋が伸び、神聖な場所であることを感じました。「宝くじが当たりますように」といった欲深い願いはすっかり消えてしまいました。絵馬には「小学校でたくさん友達ができますように」、「大災害が起きませんように」、「健康で一年過ごせますように」、とそれぞれ書きました。

神前で一年間真面目に誠実に暮らすことをお誓いしました。宮司様の貫禄のある素敵な祝詞の声を聞いて、可愛らしいお守りを手に帰途に着きました。よい一年になりそうです。

亀井久美子

総代さんより

「地域との繋がりを大切に」

渋谷邦夫

神社についての知識はほとんどなくて、総代の仕事もまるで分かっていないにもかかわらず、総代を引き受けさせて頂いたのは、平成二十一年十二月。

以来、宮司や総代の皆さん、神社の行事を通じて出会った方々のおかげで、この頃は何とか総代としての格好がついてきたような気がしている。無為に過ごしていたであろう時間を有効活用できたことに感謝である。

この経験を通して、神社は地域の人々の繋がりが大切であると痛感した。

そこで、地域の人々との繋がりをいっそう深めていくために、例えば文化講座を開催することや、花木を揃えて境内の景色に見どころをつくること、あるいは注連縄奉製や境内の美化奉仕を地域の有志の方々にお願ひし、組織化する等の活動を進めていくことが必要では、と思う。

鳥居をくぐると、そこには清々しい風が流れている。そんな神社を目指してお手伝いできれば幸いである。



弥生神社総代の皆さん

総代会長	山崎英徳 (柏ケ谷)	渋谷邦夫 (国分北)
責任役員	高橋利明 (国分北)	小山均 (国分北)
責任役員	嶋貫勝造 (国分南)	伊田信明 (国分北)
責任役員	盛屋興一 (望地)	大塚慎次郎 (国分北)

	大浦富男 (東柏ケ谷)	井上久夫 (国分南)	井上正男 (上今泉)
渋谷市郎 (柏ケ谷)	松川義信 (東柏ケ谷)	大木功 (国分南)	堀江喜作 (上今泉)
太田陽久 (柏ケ谷)	河野誠一 (東柏ケ谷)	中里由美男 (国分南)	佐藤重雄 (上今泉)
植木幸一 (柏ケ谷)	東海林庄次郎 (東柏ケ谷)	坂本良作 (望地)	
	伊関 隆 (東柏ケ谷)		

寄稿 エッセイ

「しみこんでいく神社」

私は弥生神社の権禰宜の友人です。その縁でここ数年お正月に札所での助勤に加わるなど、少しですが神社に関わらせて頂いています。

さて先日のある晩、権禰宜一家の自宅に遊びに行き、権禰宜の部屋でお酒を飲んで私だけが倒れ、翌朝遅くにリビングによるめき出ていくと、とつくにきちんと起きていた権禰宜とお母様の前に、色とりどりの縮緬の布地が華やかに並んでいて目が覚めた。聞くと、「このきれいな布で巾着袋を手作りし、七五三や初宮などのご祈禱の際に、お子様用の授与品を入れてお渡しする計画なのだ」とのこと。

そういえば弥生神社は行事のポスターも手描きオリジナルだし、お守りも権禰宜自らデザイン画を描くところから始めていたようだった。残念ながら私の地元の神社はこのような手の込んだことをしている気配はなく、ちよつと弥生神社の氏子エリアの皆様がうらやましい。お子様への授与品は節目の記念のものだし、お守りは一年間、自分や大切な人が身に着けるもの。心を込めて作られたそれらに弥生の神様がふわりと宿り、手にした皆様の中にしみこんでいくところを想像しながら・・・

また、宮司と権禰宜の企みにより、境内に地域の皆様とつながるための掲示板やベンチなどが地味に増やされるなどして弥生神社がじわじわ海老名にしみこんでいくのを遠巻きに感じながら・・・来年のお正月も私は札所にいるような気がします。



谷口明子

『南三陸・気仙沼・奥松島 参拝旅行』

平成26年 5月21日（水）～23日（金）

八幡神社、北野神社（気仙沼市）、大崎八幡宮、塩釜神社（仙台市）参拝、復興屋台村気仙沼横丁、奥松島月浜 海苔養殖場見学ほか

宿泊：南三陸ホテル観洋・松島海岸ホテル一の坊

交通：富士急バス

参加費：55,000円

主催：神奈川県神社庁相模中央支部



参加ご希望、詳細は弥生神社社務所まで、
お気軽にお問い合わせください。 046(231)2595

こかけ
蚕影神社をたどって

序 海老名の養蚕



弥生神社境内に鎮座し、現在では子受け、安産の神様として信仰を集めている蚕影神社。もともと「蚕影信仰」は、豊作祈願、蚕霊供養をしたとされ、茨城県つくば市の蚕影山神社から広まったという。この信仰が海老名の地に伝わった背景には、江戸期より盛んになった養蚕業がある。蚕影神社をたどって、はじめは案外知られていない海老名の養蚕の歴史をひも解いてみたい。

安政五（二八五九）年、ちょうど横浜が開港した当時、蚕糸業が盛んだったイタリア、フランスでは蚕の伝染病が大流行。ヨーロッパでは生糸原料の輸入先が不足していた。こうした好機の中、日本の生糸輸出は始まり、とくに横浜の開港当初の生糸相場は各地と比べて倍近くの取引価格であった。そのため武蔵国、相模国の農家での養蚕業はさかんになり、海老名市域の村々（本郷、今里、上河内、中河内、社家、中野、門沢橋、上郷、河原口、中新田、柏ヶ谷、上今泉、下今泉村など）でも養蚕が始まり、明治期に入ると農家にとって欠かせない生業となる。資料によれば海老名村の農家総数（七四〇・七四五戸）に対する養蚕農家の比は、明治三十年代には九割を超え、四十年代にも七割を超えている。

やがて福島、群馬、長野県など養蚕先進地域の技術を取り入れるようになると、生産高、品質ともに相模国の養蚕業中心地となっていく。さらに明治三十年代には有馬村、海老名村の各地で製糸工場が操業を開始する（昭和初期には廃業）。昭和二（一九二七）年には、「神奈川県蚕業試験場」が、藤沢から海老名村中新田に誘致され、その後、世界恐慌、第二次大戦で打撃を受けるも依然、養蚕は海老名市域の中心的産業であった。だが、戦後になると減反政策もなされ、養蚕農家数は減少する（年/戸 1946/289、1970/46、1992/1）。そして、平成十一（一九九九）年にはついに海老名の養蚕の歴史に幕を閉じることとなった。現在、海老名市中新田の「蚕業センター」（昭和四十二年設置）跡地の一角には、「蚕神」と刻まれた碑が残っている（昭和十年建立）。

【参照】『養蚕の神々 繭の郷で育まれた信仰』安中市ふるさと学習館、『海老名市史80』



茅の輪ぐり



平成二十六年

六月三十日

午後三時より

夏越の大祓

なごし おおはらへ

6月の境内



どなたでも参列できます。
半年間の罪穢れを祓い、
清々しい気持ちで残りの
半年を過ごしましょう。

大祓では、神職が古くから伝わる「大祓詞」を奏上し、参列者は切麻(きりぬさ)を身体にまいて清め、人形(ひとがた)で体をなで、息を吹きかけます。罪穢(けが)れを付着させた人形は、祓われた後に川に流します。大祓は、記紀神話にみられる伊邪那岐(いざなぎ)命の禊祓(みそぎはらえ)を起源とし、宮中においても古くから行なわれてきました。また、「茅の輪(ちのわ)」は、3回ぐるぐるとにより穢れや災い、罪を祓い清めます。茅の輪を腰に着けると厄病から逃れると教えた『豊後風土記』の武塔神(むどうのかみ)の故事に由来します。

人形(ひとがた)



さかさば
榊葉にゆふしでかけて誰が世にか神の御前に齋ひそめけん
た
みまへ いわ

『拾遺和歌集』神楽歌

「榊の葉に木綿の紙垂(しで)を懸け垂らして、いったい誰の世に、神の御前で祭りをするかをはじめたのだらうか。」神楽歌(採物の歌)
*紙垂(しで)：神に捧げる幣のひとつで、榊や注連縄につけて垂らすもの。
*斎ふ：身を清め神に奉仕すること。神を祭ること。
*神楽歌：神前で舞楽と共に唱和される歌謡。採物(神おろし)。前張(神あそび)、星(神あがり)から成る。神を招き、神と共に楽しみ、神を送るという構造になっている。

【参考】小町谷照彦校注『拾遺和歌集新日本古典文学大系7』岩波書店

古今のうた く神を祀るく

みかむのこ
御巫女のかざし系花、花さゆれふりふる鈴の音さやらく

佐佐木信綱『老松』(平成十七)

和合してやさしき道祖神まつ道赤麻のくきのくれなる洸し
きよ

生方たつゑ『北を指す』(昭和三十九)

かなしきよろこびとして仰ぐとき神在るは千年の雪降るむかう

成瀬有『真旅』(平成二十)

みずがねの御神体とて見返ればただ静かなる大きみずうみ

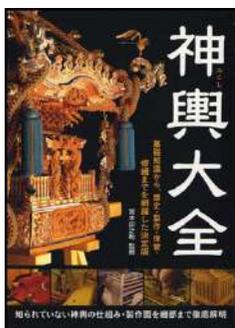
佐伯裕子『みずうみ』(平成十九)



昭和30年代の 神奈川写真帖 下巻

アーカイブス出版
編集部[編]
アーカイブス出版
2007年09月

「昭和30年代の神奈川県内を撮影した写真集です。当時の熱気が伝わってくるお祭りの写真を多数掲載。この下巻は海老名をはじめ、平塚、小田原、相模原などの様子を収録。上巻には横浜、川崎、横須賀、鎌倉などを収録しています。」



みこし 神輿大全

基礎知識から、歴史・製作・保管・修繕までを網羅した決定版

宮本卯之助[監修]
誠文堂新光社

「著者は神輿・太鼓の製造販売を行う商店の七代目店主。神輿を形作る各部分の名称、屋根を彩る装飾と代表的な形式などの基礎知識から、制作や管理の方法までを網羅して解説しています。神輿から日本の祭り文化を知ることができます。」



岡本太郎と日本の祭り

岡本太郎[著]
川崎市岡本太郎美術館
[編]
二玄社

「岡本太郎が自ら撮影した写真と文章で日本各地の祭りを紹介しています。川崎市岡本太郎美術館開催の企画展『太郎の祭り』での展示をもとに編集。昭和30年代の風景として貴重な記録ともいえる写真を多数掲載しています。」

本を読む。

今回は「おまつり」について知見の深まる図書を集めてみました。地域の人々が育てて伝承してきた無形の民俗文化財である祭りや芸能。知れば知るほどにわれわれが歴史のなかにいることが感じられます。掲載した五冊はいずれも海老名市立図書館に所蔵があります！

小河洋友

(東京都内図書館勤務)



日本の祭り事典

芳賀日出男[著]
汐文社
2008年02月

「小学生向けの図書ですが大人が読んで大変楽しめる一冊！日吉大社山王祭、鹿島の祭頭祭り、日立さくらまつり、桜花祭などを収録。季節がよくわかる代表的な祭りをとりあげ、写真と文章で説明しています。」



かこさとし こどもの行事 しぜんと生活 4月のまき

かこさとし[文・絵]
小峰書店
2012年03月

「誰でも一度はその絵を見たことがあるであろう著者のかこさとしさん。絵本『だるまちゃん』と『てんぐちゃん』などが有名です。本書では4月の行事の由来をわかりやすく紹介。二十四節気や、子どもにかかわる祭りや遊びも紹介しています。」

Now the clappings multiply - - multiply at last into an almost continuous volleying of sharp sounds. For all the population are saluting the rising sun, O-Hi-San, the Lady of Fire-- Ama-terasu-oho-mi-Kami, the Lady of the Great Light. 'Konnichi-Sama! Hail this day to three, divinest Day-Maker! Thanks unutterable unto three, for this thy sweet light, making beautiful the world!' So, doubt-less, the thought, if not the utterance, of countless hearts. Lafcadio Hearn. (1894) Glimpses of Unfamiliar Japan.

「柏手の音はどんどん増えていき、しまいにはいつせいに鳴り響く鋭い音が、ほとんどひっきりなしに続いて聞こえる。町人はみな、お日様、つまり光の女神であられる天照大神様を拜んでいるのである。『こんにちさま。日の神様よ、今日もようこそお出まし下さいました。この世界を美しく照らして下さい、そのお光のお恵みに感謝申し上げます。』特に言葉にしなくとも、無数の心がそう語っているにちがいない。」

ラフカディオ・ハーン著・池田雅之訳『新編 日本の面影』所収「神々の国の首都」(角川ソフィア文庫)



ハーンの旧邸。庭には梅が咲く。こじんまりした簡素な住居。(平成26年3月 島根県松江市にて)

ラフカディオ・ハーンと日本の神々

ラフカディオ・ハーン (小泉八雲)

嘉永三年(一八五〇)年、ギリシヤイオニア諸島サンタ・マウラ島生まれ。アメリカでのジャーナリスト時代を経て、四十歳で来日。島根県松江市にて小泉セツと出会い結婚、帰化。各地の社寺を参拝し、出雲大社に外国人で初めて昇殿。その後、熊本、神戸、東京とわたり東京大学、早稲田大学にて教鞭をとる。明治三十七年(一九〇四)年、五十四歳で死去。墓は雑司ヶ谷にある。『日本雑記』『怪談』『骨董』など著書多数。

【参照】小泉八雲『さまよえる魂のうた』池田雅之編訳、小泉八雲『神々の国の首都』平川祐弘編、『小泉八雲』神奈川近代文学館

「雪女」や「耳なし芳一」で知られる『怪談』を著したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、明治二十三年(一八九〇)年に来日して以来、当時の日本を著作に記し、異国へ紹介した。そこには、ハーンが興味を寄せた日本人の暮らしや思想、信仰が、鋭い観察眼と豊かな感受性を通して、詳細に文学的に描かれている。

ハーンは、横浜港に到着した翌年、島根県松江市に渡り、中学校の英語教師として一年を過ごす。松江での生活は、はじめて異文化である日本人の生活や慣習の中に身を置き、肌で感じる日々でもあった。その体験を記した『神々の国の首都』には、鶯の声や柏手の音、手拭いの青、人々の暮らしの息遣い、細やかな祈りの所作、信心など、ハーンの五感と心に触れた光景が、新鮮な驚きとともに生き生きと描かれている。それを読めば、ハーンと自分を重ねて過去を追体験し、別の視点や心持ちで自国の文化と向き合うだろうし、そこで出会う先人たちの素朴な信仰心に共感を覚えたりもするだろう。上記の引用は、ある朝の光景を記した文章の一部である。要約すると、

「早朝、障子を開けるとハーンの耳に、柏手を打つ音だけが聞こえてくる。やがて青い手拭いを帯に挟んだ人々が、船着き場の石段を降り、手と顔、口を洗って清め、日の昇る方に向けて四度柏手を打つ姿が目に入る。さらに、高い橋の上からも柏手の音がこだまし、船上では漁師たちが拝んでいる。彼らは太陽に向かって祈るだけでなく、西に向かって杵築の大神を拝み、あらゆる方向に向かって数知れぬ神々の御名を唱える。お祈りは「日本国中八百万の神々様」に捧げられるのである。」

ハーンは幼い頃から妖精譚やギリシヤ神話に夢中になり影響を受けてきた。それゆえか、日本の民俗に根付く霊的な事柄や神々の世界に親しみ惹かれ、論じたり物語を紡いだりした。魂の響きあいのようなものを感じたのだろう。先の文章からは、八百万の神に祈る人々に対する共感と馳せる思い、気持ちの高まりが伝わってくる。そんなハーンの特異な感受性と著作の底に流れる思想、文章の秘密は次の一節に表れている。

「霊的なものにはたいする感覚を持たない人間が、なにかに生命を吹き込むことなどできるはずもないのだ。たとえ、それが歴史書であれ、演説草稿であれ、たとえわずかにページにすぎなくとも、そうである」『さまよえる魂のうた』p.133)

ハーンの魂を揺さぶった、神々が宿る美しく愛すべき国。同時に、明治の時代を生きて、近代化によって失われゆく文化、変わりゆくこの国に、彼は愛を抱いた。それは後に著す文章に濃淡となって表れてくる。だが、そんな時代の複雑さの中で、ハーンが日本で追い続けたのは、文化や宗教の源泉のようなものと思われる。その泉を今、ハーンという言葉や物語を旅するうちに、探りあてることができるだろうか。

写真5・6：權伝馬船と舞人

船頭では女装の舞人が采幣（さいへい）を、船尾では男装の舞人が劍權（けんかい）を持って舞う。



平成二十四年八月十八日快晴、大分県国東半島から伊美別宮社の神様と神職、舞人に乗せた「御座船」が祝島三浦湾にて迎えられ、五日にわたる神舞が幕を開けた。炎天下、巫女姿の少女たち、太鼓や三味線を鳴らすシャギリ隊をはじめ、島の人たち総出で海上に向かい、港や防波堤の上で所狭しとその時を待つ。近海には大漁旗をはためかせた多くの漁船（奉迎船）と權伝馬船が、船隊をつくり列をなす。そして、やがて見えてきた御座船は賑やかな囃子と歓声の中、港を三巡し、迎える船もそれに従い、その後、港へと誘導するのである。この「入船神事」で活躍する權伝馬船の上では、舞人がふたり伸び伸びと舞い、漕ぎ手を鼓舞する。一隻に二十名ほどの漕ぎ手は、神舞の期間に戻るという島出身の人たち。練習なしでも体が覚えていくという。そのうえ島外の人たちも応援に駆けつけ、数回の練習を経て本番に臨む。



写真1：御座船を迎える漁船の列
2：島民総出で船を迎える
3：船大工さんの作業場

この權伝馬船は、島の船大工、新庄さんによるものだ。その技術は、伊美別宮社で保存されている御座船の改修にも生かされ、近年では大河ドラマ『平清盛』で登場した八六〇年前の木造船の再現も手がけ、話題になった。こうした熟練した技術と、若者たちの力強い漕ぎや舞。さらに巫女やシャギリ隊など各々の役を担う子供たちの活躍（神舞は旧暦九月二日に行われていたが、子供の参加が難しいため、昭和五十年には八月になったそう）。島で暮らすお年寄りも人々を迎えるため食事や仮神殿の設営、装飾など様々な準備をする。こうして島の出身者も縁ある島外の人たちも場所と世代を超えて、祭りを機に島に集うのだ。神舞奉賛会の橋部さんは、「農耕がうまくいくよう願った先祖から受け継いだ祭。帰京の人たちのためにも頑張る。皆、ふるさと意識がある。神舞によって島民は支えられている」と語っていた。

【参考】祝島神舞奉賛会監修『祝島 神舞 2000』、山口県文化財愛護協会発行『周防祝島の神舞行事』（昭和五十三）

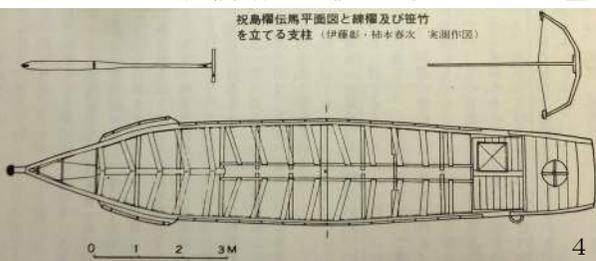
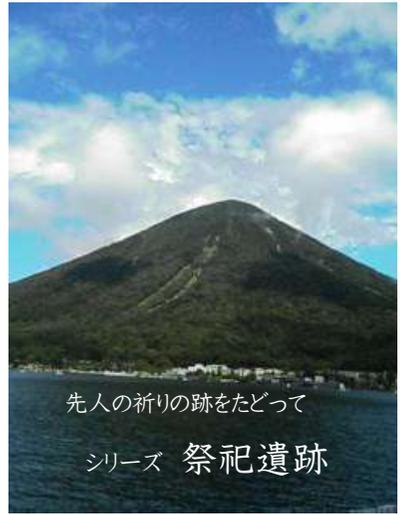


図4：祝島權伝馬船平面図
『周防祝島の神舞行事』（昭和53）より転載。
←他の伝馬船に比べ船体が長く独特の構造。舵は練權でとり、T字の權でオール式に漕ぐ。（祝島や周辺地域では、神事に伴う競船が行われたという。）



第二回 男体山頂遺跡

「男体山頂遺跡」は、栃木県日光市中宮祠、男体山頂にある奈良時代から近世にかけての祭祀遺跡である。

標高二四八六メートルの美しい円錐形をなす男体山は、別名を「補陀洛山・二荒山・国神山・黒髪山」とも呼ばれ、山麓にある二荒山神社の神体山として、古来より人々の信仰の対象とされてきた霊山である。

男体山に対する人々の信仰の起りは非常に古く、古墳時代には、森林から得られる恵みや、雄大な容姿に対する畏敬の念より、神が宿る神体山として、遠く望む場所において遙拝されていた。その後、奈良時代になり、勝道上人によって開山されると、仏教と山岳信仰とが結びつき、修験道を中心とした信仰の一大霊場となり、男体山は、近世まで祭祀・信仰の場として受け継がれてゆく。そして、山頂には、登拝を成し遂げた人々により、祭具が奉獻・埋納され、いわゆる「男体山頂遺跡」が形成されていった。

近年になり、山頂に鎮座する太郎山神社の社殿と、噴出露岩に囲まれた窪地から、銅印・懸仏・銭貨・仏具などが発見され、祭祀・信仰の遺跡として知られるようになる。地表面に露出する遺物が散逸することが懸念され、昭和三十(一九五五)年七月、二荒山神社が主体となり、学術発掘調査が行われることとなった。

わが国において初めてとなる、標高二四〇〇メートル以上の高所の発掘調査は、困難を極めたが、調査団の努力によって調査は成功し、多数の鏡鑑・銅印・錫杖頭・独鈷杵・経筒・塔形合子・銭貨・鰐口・銅鈴・鉄剣・刀子・鉄刀子・武器・馬具・農工具・容器など、奈良時代から江戸時代にわたる多種多様な遺物約七千点が発見された。

この調査は、男体山信仰の解明に著しい進展を加え、その成果は、『日光男体山』という一冊の本にまとめられ報告された。そして、出土した遺物は現在、重要文化財に指定され、二荒山神社中宮祠境内に創設された宝物館に展示されている。

鳥越道臣(考古学)

【参考文献】

- 日光二荒山神社編『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書』株式会社角川書店発行、昭和三十八(一九六三)年十一月十五日
- 栃木県史編さん委員会編『栃木県史 資料編 考古二』栃木県発行、昭和五十四(一九七九)年三月三十一日



fig. 1 男体山頂



fig. 2 遺物出土状況・1



fig. 3 遺物出土状況・2



fig. 4 遺物出土状況・3



fig. 5 男体山と中禅寺湖

写真は文献『日光男体山』(昭和38年)より転載

授与品紹介



子授け守り

「菜の花と小川、飛び立つコウノトリ」



子授け守り

「枝垂れ桜と小川、安らぐコウノトリ」



肌身守り

「桜咲く和紙にお包みして。
いつもおそばに」



学業守り

「奥深い森と山々、霞。困難をのり
越えきつと光がみえるでしょう」

「優しい鈴の音。春を呼ぶように幸せ
が訪れますように」



桜の花守り

お便りありがと
うございます。
赤い首輪は私で
す。
ニヤ〜ン
(きーこ)



青い首輪
ちよろ

フン

社務猫紹介



編集後記

境内の沈丁花も水仙も香しく春爛漫の中、お籠り状態での編集作業。宮司、権禰直とも、校正でザッザク切られ（抵抗し）涙しながら完成。御協力頂いた方々に感謝申し上げます。

製作中、出雲を旅しました。出雲大社をはじめ神魂神社、美保神社、日御崎神社、八重垣神社、神原神社…を参拝し、加茂岩倉遺跡、荒神谷遺跡では自然の中にひっそりとある祭祀の場で目を凝らし耳を澄ませました。清浄に保たれた境内にずしりと行む大社造りの木造社殿、土に埋められた銅剣や銅鐸、鏡。古代からの信仰の蓄積を、祭祀の意味を思いました。雪の舞い散る松江では、出雲を愛したハーンを訪ね、外野から純粹に日本文化と神道をみつめ直すことになりました。そして、出雲のさらに奥、三瓶山には、縄文期の大木群が香りもそのままに立木の状態で保存管理されており、太古からの生命の息吹と私の鼓動が重なるように立ちます。地元の和菓子店や陶窯に立ち寄れば、土地の資源と歴史を元にさらにとしたアイデアが生きた、洗練されたモノづくり。その発信力も刺激的でした。自然の中に神々が鎮まる出雲。先人の祈りを継ぎながら、現代人の技術と自然とが調和して、この地は守られている。その調和には、自然や神の声を聞く生身の人の感性と知恵と工夫があって。そんなシンプルな営みの中から人の交流も町の活気も湧いてくる。このことを心に、弥生神社と海老名の町を思いながら、製作をしました。

さて、南三陸参拝旅行の企画を御案内しました。東日本大震災から三年、被災地の現況を知り、東北のお宮を参拝し、復興に向けて奮闘されている方々のお話を伺う貴重な旅になるでしょう。多くの方に参加頂きますようお願いいたします。

毎年、桜散る頃の例祭。参道の屋台を食へ歩き、演舞とともに歌い踊り、神輿の熱気に包まれ、良き思い出となりますように。そして日々、この地を見守ってくださる神様に、あらためて感謝の気持ちでお参りしましょう。

(権)

編集・発行 弥生神社 海老名市国分北一・十三十三